

MACF 礼拝説教要旨

イースター礼拝

2021年4月4日

ヨハネによる福音書 1章4節~5節

1:4 言の内に命があった。命は人間を照らす光であった

1:5 光は暗闇の中で輝いている。暗闇は光を理解しなかった。

### 1) いのち

いろいろな式に参列して、いろいろなスピーチを耳にしますが、その中で多いのが、「健康に注意するように」という内容です。

もっと言えば、「健康を損ねたらもう希望はない」というようなものまであります。確かに健康は大事です。健康が損なわれたら確かに不自由ですし、大変です。でも、本当はその中にも隠されたしあわせがあるのではないかと私は感じています。

健康を損ねたものにしかわからないものってあるような気がします。

私たちは、あまり「生きていることのうれしさ、貴重さ」を感じずに生きています。

人の死を、あくまでも他人事のように感じながら生きています。

しかし、考えようによっては、「死はいつでも、どこにでも身近にある現実です。」

病気や事故からの死はいつでも、起こる可能性があります。

死と命について考えることは大事なことです。

さて、聖書では、ふたつのいのちと二つの死について教えています。

この生身のからだの死と命がひとつ。そして霊的な意味での死と命です。

私たちは、生身のからだの死と命については興味を持ち、病名をさぐり、薬を探します。

しかし、霊的ないのちと死についてはあまり興味を持たないようです。

実は、霊的ないのちと死は、肉体的な死といのちと関係がないよう考えられていますが、決してそんなことはありません。

霊的な意味での死と命をはっきりと知ってくると、生身の人生をどう生かすべきなのか、生身の体の死をどう理解すべきなのかわかってくるのです。

1:4 言の内に命があった。命は人間を照らす光であった

1:5 光は暗闇の中で輝いている。暗闇は光を理解しなかった。

新改訳聖書では

「この方にいのちがあった。このいのちは人の光であった。」となっていますが、この「言」はイエスキリストのことです。

キリストにはいのちがある。肉体的な問題について、キリストにこそ「いのち」があるのです。

霊的な面についても、キリストにこそ「いのち」があるのです。

キリストは、病める人たちをそのいのちで癒しました。キリストは、霊的に死んでいる人をそのいのちで生かすことができるお方なのです。

### 2) 復活ということ

キリストは十字架にかかり、私たちの身代わりとして神様からの罪の罰を一身に引き受けられ、死なれました。つまり神様からの裁きを受けられました。

聖書は、キリストは確かに死んだということが兵士たちによって確認されたことを記録しています。

しかし、同時に、イエスキリストは3日目に復活されたことを聖書は教えているのです。

単に「蘇生」したというのではなく、肉体を持ちながら、死ぬことのない体をもってよみがえられたのです。

栄光の体をもってよみがえられたのです。

つまり、キリストによって、肉体的ないのちと霊的ないのちが統合されているとあってよいと思

ます。今の私たちには、霊的ないのちと肉体の命は別々のもののようにしか理解できません。

しかし、イエス様がよみがえられたことによって、もはや霊的ないのちも肉体のいのちも別々なものではなく、同じ命の与え主から届けられているということがわかります。

よみがえられ、死に打ち勝ったイエス様がおられるので、そのお方によって肉体的な死はすでに乗り越えられている、つまり信じるものは、肉体的な死によって滅ぼされたり、絶望状態に置かれたりすることはないということです。今、しばらくの間、わたしたちは病気や困難に悩まされますが、すでにそういう肉体的な死はイエス様によって知られ、イエス様によって克服されていますので信じるものには希望があるのです。

私たちにとっての死は、残されたものにとっては、寂しいものではありませんが、キリストと一緒に栄光の体に着替える日だというふうに考えてもおかしくありません。

霊的なことを言えば、キリストがよみがえられたので、罪によって音信不通であった神様との関係がいわば「交信可能」になりました。

キリストは私たちの罪の代価を支払ったという言葉をよく使いますが、これは神様とのかかわりにおける霊的な面での代価です。

お金の有効性がまったく考えられない世界での問題です。イエス様は罪のない、霊的に曇りのないお方だからこそ私たちの身代わりに死に、霊的な代価を払うことができたのです。

そして、そのお方がよみがえられたということは、霊的な意味では、代価は神様を満足させたという意味になります。もし、裁かれて、その代価が不満足、不十分なものなら「死」に縛られたままだったはずです。

でも、イエス様はよみがえられました。肉体的な死を打ち破り、神様の心を満足させたのです。復活はそのことの証しです。ハレルヤ。

そして、私たちもそのおかげで神様と霊的な交流が可能になり、みことばがわかるようになり、聖霊の働きに敏感に応答できるようになってきました。いわゆる聖霊による健全な違和感などを感じられるようになりました。

### 3) 光は闇の中に輝いている。

今ほど肉体的にも霊的にも「死」が恐れられている時代はないかもしれません。

死は現実的です。死が怖いのは肉体的な問題もありますが、死んでからどうなるのだろうということへの不安もあるかとおもいます。

聖書は「イスラエルよお前は自分の神と出会う備えをせよ。」と奨めています。(アモス4:12参照。)

神に会う備え、死によって人間は否応無しに霊的な現実として「神様に会う状況」へと押し出されます。

罪の問題、不正や不義、そういう問題が心にあると、それは恐れをつくりだします。

普段あまり感じないかもしれませんが、考えないかもしれませんが、そういう心の中身があなたの表情を作り、そういう心の中身があなたの性格やあなたの立ち居振舞いを決定づけています。霊的な問題が現実的なあなたのあり方に大きな影響を及ぼしているのです。

しかし、いのちなるキリストは、その暗闇を「光」として照らしておられます。

キリストが死なれたのはあなたの霊的な死を死ぬため、つまりあなたのこころの中身を神様の前であなたに代わって清算してくださるためでした。同時にキリストの死と復活は、私たちの肉体のいのちが、それだけで完結するものではなく永遠のいのちにつながる大事なものののだということ

を示すためでもありました。光があるのです。希望の光があるのです。

死に対して「光」「いのち」が届けられています。社会的にも、個人的にも、靈的にも死んでいる」という自覚をもっているあなたに聖書は教えます。聖書の中でおそらく最も有名な言葉はこれです。

ヨハネ 3：16-18 「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである。神が御子を世に遣わされたのは、世を裁くためではなく、御子によって世が救われるためである。御子を信じる者は裁かれない。信じない者は既に裁かれている。神の独り子の名を信じていないからである。」

そして、ヨハネ 8：12 には「イエスは再び言われた。「わたしは世の光である。わたしに従う者は暗闇の中を歩かず、命の光を持つ。」とあります。ここにこそ、希望にあふれた命が存在します。

イエス様とつながること。

イエス様に愛されていることを深く認めつつ生きること。あなたは愛されており、永遠のいのちを持つようにと今、生かされているのです。

ちなみに、永遠の命とは「年月や長さのことではありません。

「いつまでも、途切れることなく、見捨てられこともなく、見放されることもなく

神の愛の中にしっかり包まれて神とともに安息しながら存在する」という意味です。

1:4 言の内に命があった。命は人間を照らす光であった

1:5 光は暗闇の中で輝いている。暗闇は光を理解しなかった。

この言葉が今日、あなたの心をしっかりと捉えま

すように。

\*\*\*

「MACF 礼拝映像」はこちらです。

[https://youtu.be/QGACTN6LW\\_Y](https://youtu.be/QGACTN6LW_Y)